

伊藤隆道のインテリア・オブジェクトにみる1960年代のジャンル解体運動の意義

橋本啓子 (近畿大学)

日本の1960年代の造形を特徴づけるもののひとつに、美術・建築・デザインのジャンルの垣根を取り払おうとした動きがある。この動きは店舗のインテリアや展覧会ディスプレイ、商環境のオブジェ等、さまざまな造形表現として結実したが、本発表で採り上げるのは造形家の伊藤隆道(1939～)が1960年代後半から1970年代前半にかけて行った「インテリア・オブジェクト」の試みである。

造形家の山口勝弘によってインテリア・オブジェクトと呼ばれた伊藤の作例は、例えば《京王プラザホテルロビー光造形》(東京・新宿、1971)のように、小さなボールや針金、銀紙、電球等で作られたモビールが何千個も天井から吊り下げられ、ホテルやオフィスビル、ナイトクラブのロビーを覆うというものである。「インスタレーション」の形式に近いが、実のところ、伊藤が試みたのはインテリアでもオブジェでもない造形、すなわち、確立されたジャンルのいずれにも属さない造形であった。つまり、それは「美術」にカテゴライズされることに対して徹底的に抗おうとした。

だが、伊藤のインテリア・オブジェクトが美術のインスタレーションときわめて似通っていることは否めない。そこで沸き上がってくる疑問が、伊藤を初めとする1960年代の前衛作家たちがめざした、いずれのジャンルにも属さない造形表現とは果たして何であったのか、という問いである。1960年代当時にジャンル解体を主唱した山口勝弘や批評家の東野芳明でさえも、これについて明確な定義を行わなかった。それゆえだろうか、伝説的な1966年の「空間から環境へ」展(東京、銀座松屋)も、ジャンル解体の試みというよりは空間とオブジェの単なる併存の感が否めず、なぜ、同展がジャンル解体の動きの象徴とされたのか、確固たる理由は不明である。

そこで、本発表で論じるのは、伊藤のインテリア・オブジェクトこそが、当時の「ジャンル解体」の思想の精緻な具現であったと解釈され得ることである。彼の作品をつぶさに見れば、美術・建築・デザインの各ジャンルを成り立たせている要件を転覆させる企てがそこに見出される。本発表ではまず、その転覆の諸相について述べたい。次に、これらの転覆が伊藤自身の造形態度だけでなく、1960年代の日本の造形作家に共通する意識——すなわち、明治以降に持ち込まれた西洋の造形思想が、あたかも古代から日本に存在していたかのように感ずることの不気味さ——の所産であるという仮説の立証を試みたい。この立証は恐らく、1960年代の日本における「ジャンル解体」の真の意義を浮かび上がらせることになる。